

日本古代歴史叙述の変容と受容の展開

一入宋僧の裔然の『王年代紀』について

李 果然

北海道大学 大学院文学院

日本古典文化論研究室



未来社会のあるべきかたち

- ◆ より高いレベルの多文化共生の現代社会へ
- ◆ 東アジア諸国による連携で地域文化や経済交流の活発へ、人文学科の社会への実装・還元が実現
- 本研究は越境する『王年代紀』のテキスト性に向けて、古代日本の歴史叙述の受容のあり方の一端を究明することを試みる

裔然の中国渡航と『王年代紀』

- 日本の東大寺僧の裔然（ちょうねん）が巡礼のために、983年末に中国の北宋に渡航し、そして翌年（984）宋太宗に謁見、献上されたものには『王年代紀』という書物がある。神代から円融天皇の系譜を記したその本文は日本に現存せず、中国元代に編纂された『宋史』に長大な文章として引用されている。
- 『王年代紀』にある天皇代の出来事を同時期中国の某年に当てるに比定する「当此土（中国王朝名）○年」といった表現が用いられる。

基本の問題点について

- 「此土」は中国を指す。「当此土（中国王朝名）○年」といった年代比定の表現はこれを引用する中国側の編纂者が工夫するもの見解を出す研究者がいる。
- 『王年代紀』の皇統譜の中で、年代や出来事もなく、天皇号だけを羅列する天皇は少なくない。これは人為的に削除されたか
- 『王年代紀』で仏教徒の中国遣使記事が多く、その全文脈に合わせて、どう理解すればいいか

考察後の得られた見解

- 「此土」で始まる年代比定の表現は、裔然『王年代紀』固有の表現であり、それは中国に渡航した僧人である裔然＝海外越境者という特殊性によって生み出された表現と考えられる。
- 宋代に成立した『仏祖統紀』に裔然『王年代紀』の引用があり、それと合わせて比較対照したところ、年代や出来事もなく、天皇号だけを羅列する現象は宋史の『王年代紀』が提供する情報の域を出ない。『王年代紀』原文はそのままだと確かめられる
- 日本における仏教史が天皇政権によって支えられるものである歴史叙述は『王年代紀』によって構築されている。